

コラム



井路川に係留された「三枚板」



井路川



強頸地藏尊

井路川の思い出

井路川がうちの裏を流れていた。淀川からの流れだったので、割にきれいな川だった。夏の前頃はホタルが飛んでいて、夜になるとパツと光ったり消えたりして、もの悲しい風景だった。外の明かりがない頃はものすごい印象だ。川は物を運ぶのに通っていたが、家もまだ少な

い頃だし、下の方の百姓たちが田圃の肥料にするのに我々の家の汲み取りによく来ていた。川の水は割にきれいなので、洗濯物もしに来ていた。子どもらは小さい魚やらメダカなどを追い回していた。

城北バス住宅

第2次世界大戦の幾度かの空襲によって、市街地中心部は広範囲にわたって焦土化しました。

城北バス住宅は、焼け出された人々の救済のため、廃車になった木炭バスを利用した市営住宅で、バスを円形に並べて、その中心に共用施設を配置していました。

バス住宅には電線が引き込まれ、居住スペースを確保するため建て増しが行われていました。周りには、畑や野菜作りも行われていた空き地があり、江野川、爆弾池等とともに、子どもの遊び場であったことを覚えています。



城北バス住宅（復元模型）
（写真提供：大阪くらしの今昔館／撮影：京極寛）

第3回大阪大空襲 昭和20年6月7日。私は…「二人の回想」

自分が生きていたことだけが確か。

その日私は造幣局にいた。空襲警報解除と同時に屋上へ出てみると、空からは真っ黒な雨が降り、見渡す限りの焼け野原。まだ、所々には火の手が見えた。もうこの世の終わりかと思う気持ちになった。

当時、男子局員はほとんど戦場か軍需工場で、残っているのは管理職の男性とあとは女子ばかりでとても心細いことだった。みんな家が心配なので、とにかく女性は帰ってよいことになった。「危なかったらすぐ引き返してきなさい」上司の温かく心強い言葉を背にして、手ぬぐい一本余分に鞆に詰め早速帰路につく。

当時、父が女学校勤めだったので、まずその動員先である大阪城内の師団司令部へ安否を確かめに回った。「生徒全員無事引率して学校へ帰られました」ということを聞いてやっと一安心。さあ自分が帰ろうとしたら、野田橋から北へは電車もなく都島は焼け野原で通行不能になっている。

仕方なく手ぬぐいを道路わきの水に浸して、まだ焼けくすぶって異臭を放っている都島を避け、野田橋から四条畷方面へ迂回して、途中道を尋ねながら新森小路の我が家へついたのは夕暮れだった。

勿論、全部歩き通し。歩くのが当たり前みたいな世の中だった。その夜、家族が揃ったのは何時ごろだったか記憶は定かではない。自分が生きていたことだけが確かなことだった。

容赦ない機銃掃射

1945年 終戦（8月15日）の年の6月7日。

B29、250機以上。B24、護衛機を引きつれ小型爆弾・油脂焼夷弾で空爆し、死者2,800人を出した。上町台地にあった私の母校は、6月1日の空襲で被災し休校になっていた。そのため在宅していた私は、その日の空襲とともに指定の避難場所である淀川河川敷に逃げたが、この付近で米軍の容赦ない機銃掃射を受けた。

足にその時の傷跡が60年たった今も残っている。今は薄く痕跡をのこすのみであるが…。

空襲後あちこちに散らばった遺体（身元不詳 引き取り手なし）は数ヶ所で野焼きされ茶毘に付されて遺骨はその土中に埋められた。

これを哀れんで地元の篤志家、東浦栄二郎氏（故人）が遺骨を1ヶ所に集め、庭石に千人つかを刻んで（実際は1,000体よりもずっと多い）置かれたときいている。

現在は由来記と共に黒御影を台座にして千人つかがあり、毎年6月7日に慰霊祭が行われている。

千林「強頸地藏尊」（清水1丁目）

旭区には、古くから千林の「強頸絶間^{ごうくびたえ ま あと}址」が言い伝えられている。

かつて村名であった「千林」は「森小路の如く林にてもありしならん、或いは「千林」は「瀬林」より転化せしならん」ともいわれ、ここで気になるのは「瀬林」である。

瀬は浅瀬や流れの急な所をさし、この強頸絶間は茨田堤（淀川の堤防）の決壊場所である。

『日本書紀』には「大字千林一の絶間これなり。絶間は堤の決潰せし址をいふなり。其址池となりて絶間池と称したが、早くより水涸れたり。此地往古は河内茨田郡に属せり。茨田堤は淀川の堤防なり。仁徳天皇11年、茨田堤を築くに、二の絶間ありて築き難し。天皇、

夢に武蔵人強頸、河内人茨田連衫子（コロモノコ）を以て河伯を祭らば成らんとの神誨ありて、其人を覓め給ひて之を得給へり。その強頸の人柱となりし處、即ちこの絶間なり。-----。」

この地に今も、強頸地藏尊がまつられている。

おまつりをされている方によれば「日本書紀にもあるように、昔は河内国の百姓さんたちは、淀川が決壊して水害で困る。強頸さんが人柱になったら逃れられると相談したら誰もいない。くじびきをして、当りは強頸さんが当たりクジを握っていた。水害がなくなった。百姓さんもよろこんだ。」と話されている。

城北（赤川）「今」・「昔」、思いつつ～ブラ歩き

秋の日、地域史づくりのメンバーが城北公園に集まった。この公園も淀川改修前は川の中であった。春は梅（老木）、桜、花菖蒲、秋は菊花展。池では鯉・タナゴチモロコ、釣り人、冬はカモ・ユリカモメが遊ぶ、多くの人達の憩いの場所。

淀川の堤防に登り千人つかに参る。菅原城北大橋はワンド群やヨシ原など周囲とマッチする。斜張橋の橋上からは日の出・夕日の美しい景色・大阪市内を一望できるスポットである。

明治時代、船が安全に往来できるように淀川がケレップ水制工事で改修された。ケレップ水制工事により、土砂が体積し本流と隔離され出来た池ワンド群を見る。堤防にはワンドに生息する魚類の看板がある。淀川左岸を下り、赤川方面へ。昔の赤川は、淀川の中のアシや水草の生い茂った所であった。淀川の上流から運ばれた泥砂によって出来、一面が湿地となった。土地が低く湿地が多いため、淀川のたびかさなる洪水で田畑、家が流された歴史。

赤川廃寺跡碑（昭和3年半ば、淀川左岸で弥生式土器、須恵器をはじめ遺物が、護岸工事が完成していない

川岸に遺物を含む土層が露出していた）をさらに下り、赤川鉄橋へ。戦前からあるトラス型の古いもので人と列車が渡る珍しい鉄橋。堤防下では昔なつかしい（昭和30年頃～）ラーメン屋台が数台並んでいる。

日吉神社を参拝。古い家が多く残っているこのあたりの場所を見ながら城北小学校へ。明治8年(1875)に重誓寺から中村小学校に開校し、その後転々として明治35年(1902)5月2日現在地へ。城北小学校創立記念日とし5教室から始まった。

赤三商栄会を見て回り、元生江青少年会館で休憩。歩いた処を思い出話し合ったあと解散。



城北公園（平成21年(2009)6月24日の「まちあるき」にて）